



The Twenty-ninth Regular Report

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所
Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

バングラデシュ



ゴクル・メダ寺院（ベフラとラクシンダールの家）－古代ベンガルの特筆的な建築－

ナヒード・サルタナ 地域事務所長
文化省 考古局

ブータン



ミテンパ・ラーカンの廃墟

カルマ・テンジン 上級建築士
ブータン政府 内務文化省 文化局 文化遺産保存課

ニュージーランド



南島南部テ・パパ・アタウハイにおける自然保護局の文化遺産保護プロジェクト
(2022～2023年)

マシュー・シュミット 上級アドバイザー
ニュージーランド自然保護局 南島南部

フィリピン



サン・アグスティン修道院図書館－マニラ：失われた古文書のデジタル復刻

ロエラ・レヴィラ・ベイシック 修復専門家/室長/管理者
サン・アグスティン博物館（マニラ、イントラミュロス）

バングラデシュ

	ゴクル・メダ寺院（ベフラとラクシンダールの家） ー古代ベンガルの特筆的な建築ー
	ナヒード・サルタナ 地域事務所長 文化省 考古局

古代プンドラヴァルダナ・ブクティ（州）の首都であったプンドラナガラは、現在マハスタンガルとして知られている。この地は、バングラデシュのボグラ地区の北 12km に位置する。約 2500 年前にこの地に州都が置かれ、その面積は南北 1525m、東西 1372m に及ぶ。首都は周囲を堅牢な城壁で囲まれており、事実上城砦都市であった。また、城砦都市の防御としては、東・北にはカラトア川が流れ、南・西側は深い堀で囲まれていた。プンドラナガラの南北 20km までは郊外が開発され、多くの民家、宗教施設（仏教寺院、僧院、仏舍利塔）古道、池、井戸が築造された（図 1）。

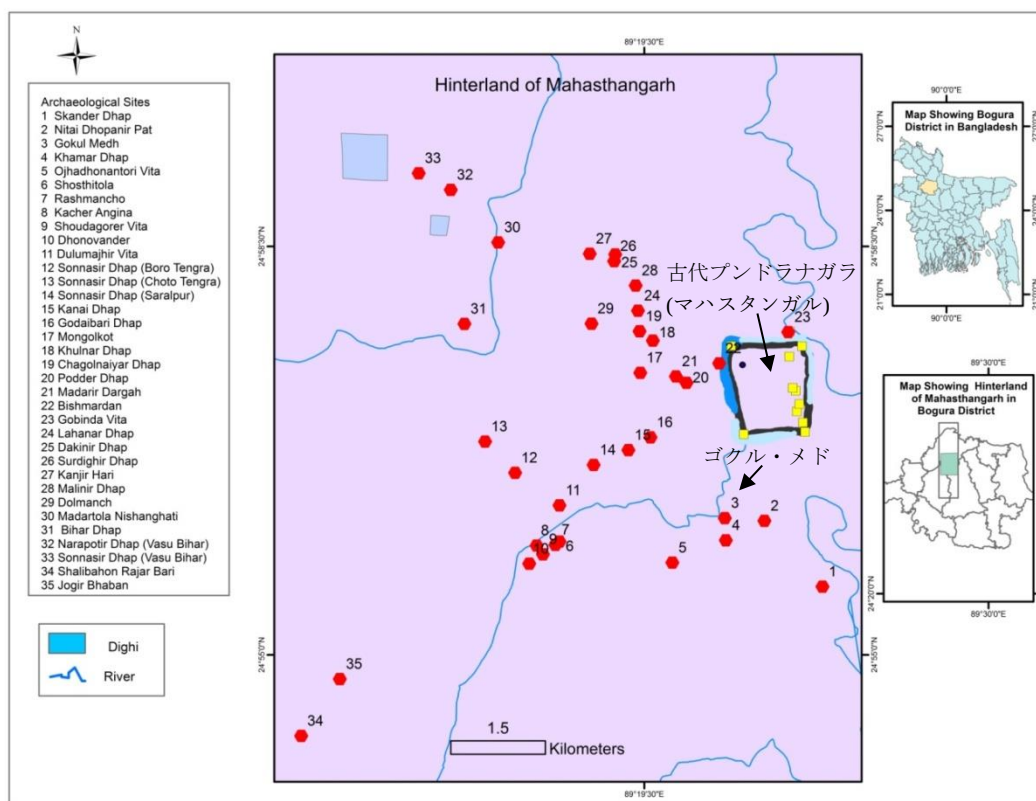


図 1. マハスタンガル近郊の遺跡の位置。No.3 が Gokul Medh

古代遺跡ゴクルメドは、ベンガルの恋愛民話の主人公とヒロインであるベフラ-ラクシミンダーのバシヨール・ガル（*Bashor Ghar*）としても知られている（バシヨール・ガルとは、新婚夫婦が結婚式の後、初夜を迎える部屋を指す）。ベフラは、ベンガル社会で人気のある物語を題材にした詩「マンサマンガル」の主人公の一人である。「プラーナ」によれば、ベフラは天空のアニルツダの妻ウーシャーとされ

る。他方、民話によれば、彼女（ベフラ）はウジャニナガラシャエベンの娘とされている。ラクシミンダーはチャンパクナガラ・チャンド・サウダガーの末子である。ベフラはラクシミンダーの妻であり、彼はマナサマンガル詩の英雄であった（Pidiya, 2003:202）。この地域でよく見られる、高さのある特徴的な塚は、さまざまな理由で彼らの名と結びついている。ネティ・ドーパニア・パート、オジャ・ダナントリア・ダハープ、チャンド・ムー・ハットの文化的な塚はこの物語と関連づけられており、これらはゴクルメド遺跡からやや離れた場所に位置している。

ゴクルメド遺跡、別名ベフラ・ラクシミンダーのバシヨール・ガルは、首都プンドラナガラ西 4km にある地域特有の塚で、長さ 80.46m、幅 55.77m である。平地から 13.10m の高さに広大な寺院が建立され、この寺院は多室構造の天才的な建造物の顕著な例である。この古代遺跡の地理的位置、建築様式、建築技術、工法には特別な重要性がある。この種の建築様式は、古代ベンガルでは珍しい。考古学調査により、さまざまな形状や大きさの部屋、計 172 室が発掘されている。各部屋は、高さがさまざまで、下から上へ墳墓の坂に沿って並べられている。これらの高低差がある各部屋は、列ごとになっており、粘着性の強い土で作られている。高さの異なる部屋の位置から、これらはそびえ立つ寺院や仏塔建築の基礎として使用されたことが容易に推測される。このような多層で平行な補強壁のある基礎は、古代ベンガルの重要な建築的特徴である（図 2・図 3・図 4）。



図 2. 発掘後のゴクル・メド遺跡。写真は 1935-36 年の ASI 年次報告書から抜粋。



図 3. ゴクル・メド遺跡の全景

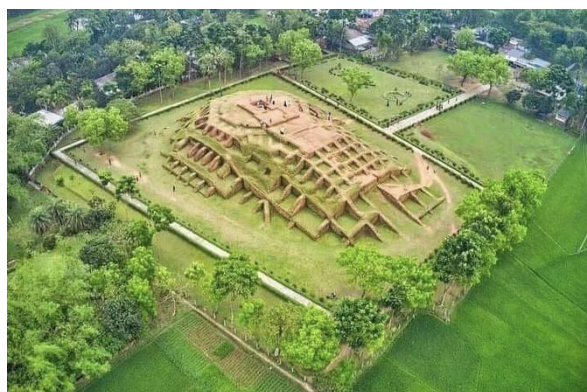


図 4. ゴクル・メドの航空写真

この革新的な建設技術は、イスラム教の伝来以前の 5 世紀にわたってベンガル地方で普及していたものである。この工法は、現代の杭打ち工法になぞらえることができる。この工法は、バングラデシュの沖積土の土壌で、氾濫原の上で、高く大型の宗教建築や神聖な建造物を建立するのに非常に有効だった。同様の工法は、ベンガルから遠く離れたインドのウッタラプラデーシュ州バレイリー地区のアヒチャトラでも見られる (Ahmed, 1997:41-42)。祠の台座は 24 面の多角形であり、その上に八角形の床を見ることができる。おそらく、この床の上に仏教寺院か仏舎利塔が建てられたと考えられる。しかし、現在のところ、この床の上に壁が築かれた形跡は確認されていない。(図 5)

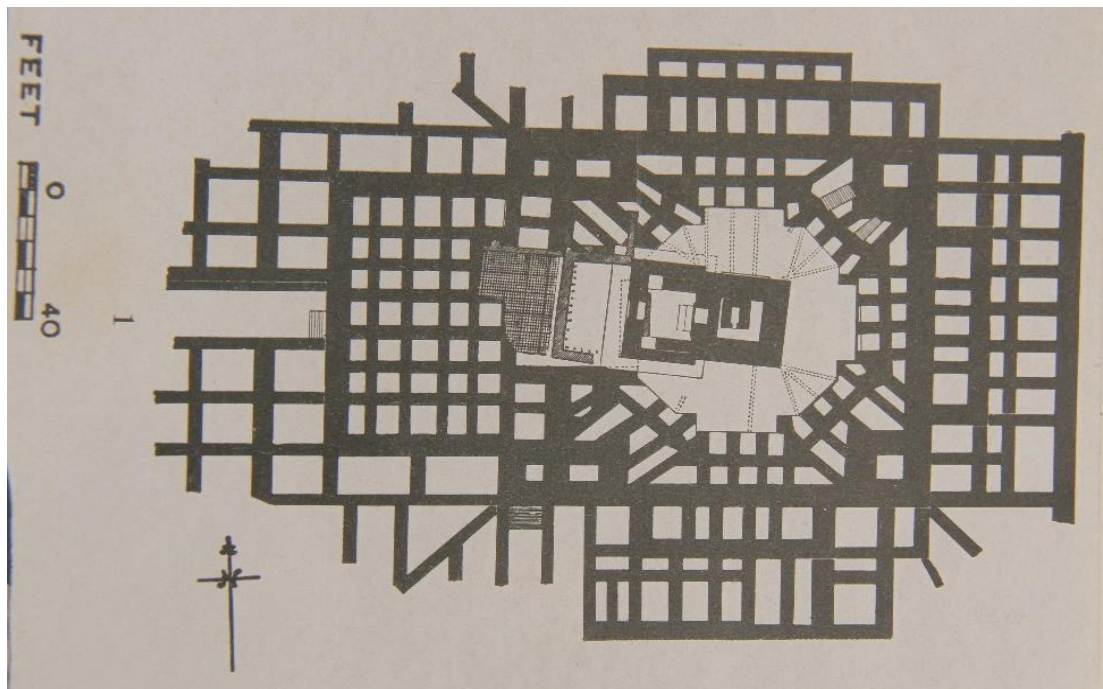


図 5. ゴクル・メドゥ遺跡の平面図と円形坑道；写真は 1935-36 年の ASI 年次報告書より抜粋。

このほか、発掘調査によって、多くのテラコッタの装飾板、装飾レンガ、人物像や動物像が発見されている。これらのテラコッタの装飾板は典型的な「グプタ」様式である。「これらのテラコッタから得られる証拠の強い信憑性から、この遺跡は紀元 6 世紀または 7 世紀のものと考えられる」。(Majumdar, 1990:69) (図 6 - 図 10)



図 6、図 7 テラコッタ装飾板の破片：1934-35 年のゴクル・メドゥ発掘調査報告書より抜粋。

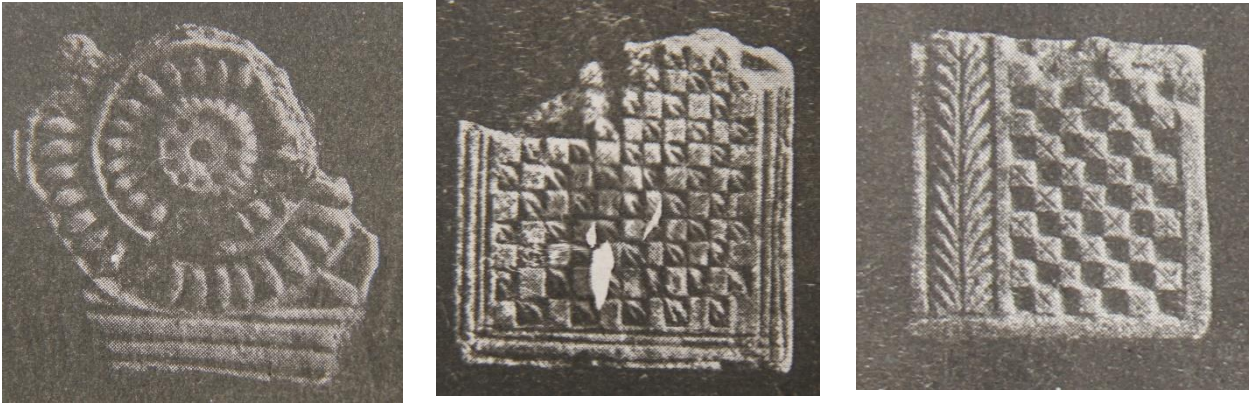


図 8、図 9、および図 10. 装飾用レンガの破片；写真は 1934-35 年のゴクル・メッド発掘調査報告書から抜粋。

出土した遺物から、この巨大な遺跡は元々仏教の神殿であったことが判明した。寺院は、北東側の外側に幅 1.46m の階段があり、平地から約 7.62m の高さで露出していた。「北東側、土塁の足元から約 25' の高さに、幅 4' 8" の階段が発見され、踊り場があり、祠を囲むテラスに通じていた」。(Majumdar, 1990:67) .

セナ時代（11－12 世紀）には、仏教寺院または仏塔を取り壊すか放棄した後、同じ場所に方形の寺院（8.22 m× 8.22 m）とベランダが建てられた。第 2 期の建設は、11 世紀から 12 世紀のセナ時代にここが始まったとの証拠がある（Zakaria, 2007:194）。

後期の神殿の内部では、室内から人骨が発見された。この部屋の下には、直径 3.68m レンガ造の円穴がある（図 11、図 12）。円穴の中には穴が 12 個開いた石があり、中央の穴の内部で金箔が発見された。金箔には雄牛が描かれているのが見られる。金箔上の雄牛の描写から、発掘された建築物がシヴァ神殿であったと研究者らは考えている。「金箔は祠堂の鎮壇具としてここに置かれたようであり、雄牛の姿から判断して、シヴァ神崇拝のための祠堂だったと考えられる」。(Majumdar 1990 : 68)



図 11. 後期神殿の航空写真



図版 12. 後期神殿の近景

研究者は、この牛の像とテラコッタ装飾板は後期のものだと考えている。「金箔に描かれた雄牛の像は、同時代のテラコッタと比較するとかなり粗雑であり、後期では、一般にベンガルの芸術家が優れていたことは疑いない」。(Majumdar 1990 : 60)

現在、ゴクル・メッド寺院はバングラデシュ文化省考古学局の保護下にある遺跡である。研究者以外にも、この場所（ゴクル・メッド）がベンガルで人気のある民話「ベフラ-ラクシミダー」の物語に関連していることから、ベフラ-ラクシュミダーのバショール・ガルを見るためだけに、多くの観光客や旅行者がこの遺跡を訪れ、散策する。

1934 年から 35 年にかけて行われた考古学調査によって、壮大で素晴らしい建物跡が発掘された。この種の建築技術や工法はバングラデシュではあまり見られないものである。発掘調査により、前期：6－7 世紀の仏教寺院や仏塔と、後期：11－12 世紀のヒンドゥー寺院遺構から、古代の構造や遺物が明らかになった。

参考文献

1. Majumdar, N. G., Archaeological Survey of India Annual Report, 1935-36, Swati Publications, Delhi, 34 Central Market, Ashok Vihar, Reprinted 1990.
2. Ahmed, Dr. Nazimuddin, Mahasthan Mainamati Paharpur, Bangladesh Government Press, Tejgoan, Dhaka, 1997.
3. Sen, Provash Chandra, Mahasthan and its Environ, Jyotish Chandra Ghoshat the Cotton Press, 57 Herrison Road, Calcutta, 1929.
4. Zakaria, Abul Kalam Mohammad, *Bangladesher Protnashampod*, Moumita Printers, 25 Paridash Road, Dhaka, 2011.
5. Bangla Pidiya, Part-3, Bangladesh *Jatio Jnankosh*, Bangladesh Asiatic Society, 5- old Secretary Road, Nimtoli, Dhaka-1000, 2003.
6. Bangla Pidiya, Part-7, Bangladesh *Jatio Jnankosh*, Bangladesh Asiatic Society, 5- old Secretary Road, Nimtoli, Dhaka-1000, 2003.

謝辞

1. Md.Abu Sayed Inam Tanvirul, Custodian, Shahjadpur Rabindra Kachhari Bari, Department of Archaeology, Bangladesh.
2. Md.Abul Kalam Azad, Photographer, Rajshahi Regional Office, Department of Archaeology, Bangladesh.
3. Md.Murshid Kamal Bhuiya, Serveyor, Rajshahi Regional Office, Department of Archaeology, Bangladesh.
4. Md. Abdus Salam, Computer Operator, Rajshahi Regional Office, Department of Archaeology, Bangladesh.

ブータン

	ミテンパ・ラーカン遺跡
	カルマ・テンジン 上級建築士 内務文化省 文化局 世界遺産保存部 考古課



ミテンパ・ラーカン遺跡

はじめに

ミテンパ・ラーカン遺跡は、チュカ県チャプチャ地区にある遺跡である。ミテカ村の丘の斜面にある。村はティンプーの町から約40kmのところであり、ティンプー-プンツォリン間の高速道路に沿ったダムチュからの支線道路でつながっている。高速道路から遺跡までは約1時間である（図1参照）。村はかつて5世帯しかなかったといわれ、現在もラーカン遺跡の近くに1軒の家があるのみで、そこに人が住んでいる。現在、ラーカン遺跡は、風雨や時間の経過によって摩耗し、一部が雑木林に覆われたままになっている。



図 1. Google Earth による遺跡の航空写真

遺跡の正確な位置（サイト座標） 北緯 27 度 15 分 22.51 度、東経 89 度 32 分 14.52 度

歴史的背景／口伝

寺院や僧院は、地元ではラーカンと呼ばれ、ブータン全土に見られる宗教的建造物である。これらは数世紀前に建立されたもので、中には紀元後 5－6 世紀以前建造のものもある。

ミテンパ・ラーカン遺跡は、ツァムドラク・チェジェ・ンガワン・ドルクパの時代、17 世紀から 18 世紀にかけて建立されたものである。ツァムドラク・チェジェ・ンガワン・ドルクパはミテンパ・ラーカンの創始者であり、同じ村にツァムドラク僧院を建立した。ツァムドラク僧院は少なくとも 18 世紀にはその存在が確認されている。そして、口伝によれば、ミテンパ・ラーカンはツァムドラク僧院よりも建立時期が早かったという。このことから、ラーカンが建てられたのは 17 世紀から 18 世紀の間と考えられる。

ツァムドラク・チェジェ・ンガワン・ドルクパは、第 2 代ガントル・テンジン・レグパイ・ドンドゥブ（1645-1725）に教えを授けた高名な師である。ラム・ンガワン・ドルクパよりはるか以前、ドリグン・チョパ・リンポチェと呼ばれるチベットの師は、息子のドゥルブトブ・サンガイがブータンを訪れ、自分の血統を確立するであろうと予言した。その予言に違わず、オータイ・サンガイという名のドゥルブトブが現在ラーカン遺跡のある場所を訪れ、三度続けて石が燃えるのを目撃したとされている。「ミ」は「火」、「テ」は「燃やす」、「カー」は「場所」を意味し、ラーカンはミテンパと名付けられた。

口伝によると、ラーカンは火災により消失したという。火災後、村人の力のみではラーカンを修復することはかなわず、廃墟と化したという。数年後、村人たちも水不足のため村に長く住めなくなり、この地を捨てたと言われている。現在、ラーカンから数メートル離れたところに家屋跡を見ることができる。

遺跡の考古学的調査

現存するミテンパ・ラーカンの遺跡は、瓦礫と草木にほぼ覆われた状態である。建造物は火災で焼失したが、壁の一部が残っており、過去の建築の配置や形態を示す証拠となっている。

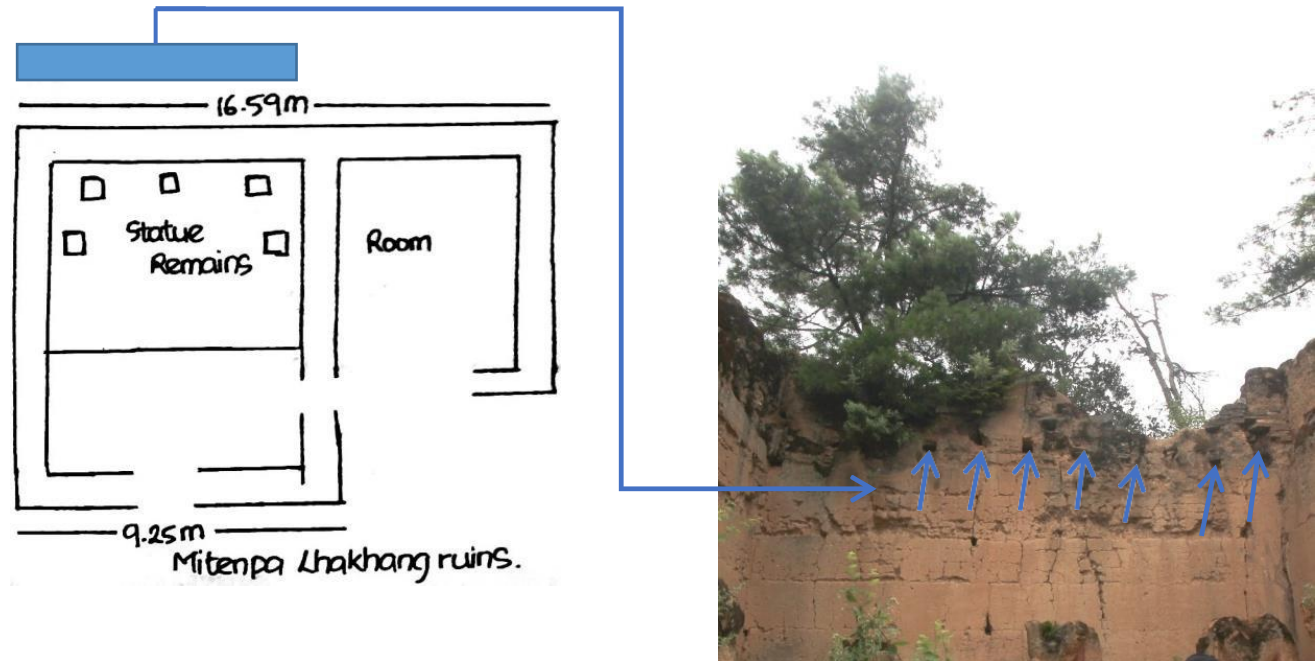


図 2. 廃墟の背面ファサードの梁穴

ラーカンは二階建てで、遺跡の背面ファサードの根太の穴が明確に見えている（図 2）。ラーカンの正面玄関は南向きで、もう 1 ヶ所は東からの入口である（図 3）。遺跡の一階は、地表から 1 メートルほど上げられた基壇で構成されている。基壇上には 5 体の大型の彫像が安置されている（図 4）。彫像の高さはおおよそ 7 フィートである。彫像はどれも著しく損傷しており、顔も腕も失われている。これらの彫像は土製である。小枝や竹を使って彫像の形を作り、外側から石膏を固定している。顔も腕もないため、非常にわかりにくい。彫像のうち 2 体には、赤く塗られた衣の一部が見られる。

長さ 6.7 メートル、幅 3.2 メートルの基壇の下は、儀式に使用された。壁の北西のファサードに向かって、長方形のスリットが 1 つ、彫像のほぼ真上に配置されている（図 5）。これはかなり高い位置にあり、ラーカン内部に窓の形跡がないことから、おそらく適切な空気循環と採光のために使用されていたと思われる。

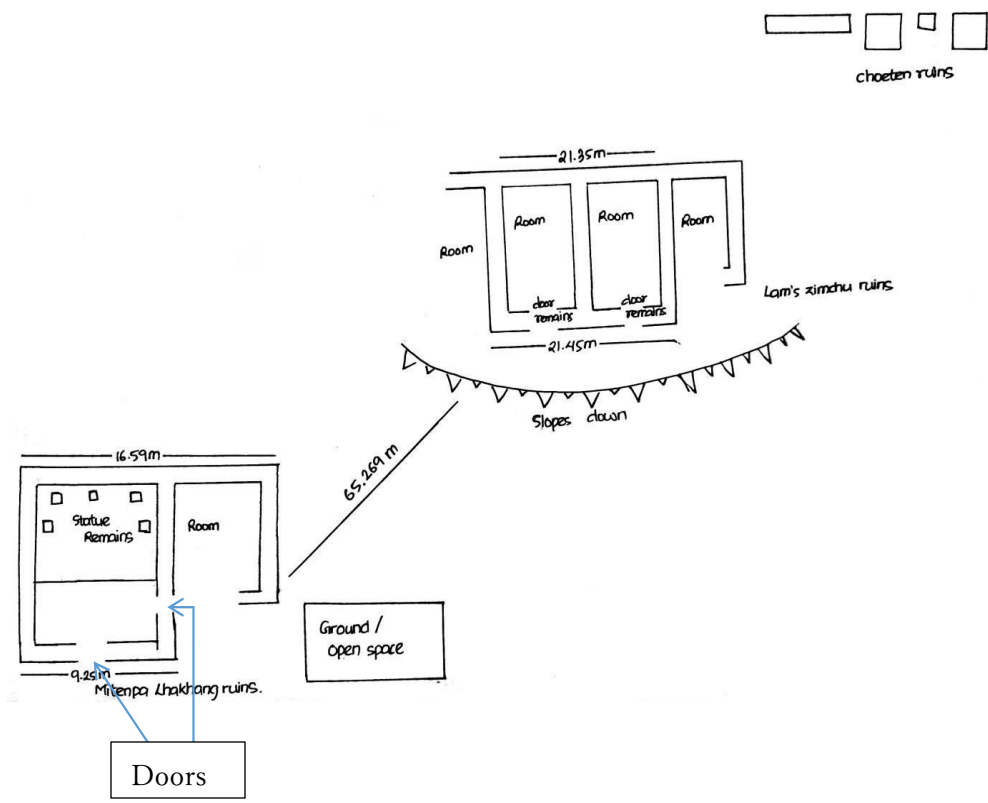


図 3. ミテンパ・ラーカン、ラムズ・ジムチュ、チョルテン遺跡の平面図



図 4. ラーカン遺跡内の顔のない彫像



図 5. 四角形のスリット

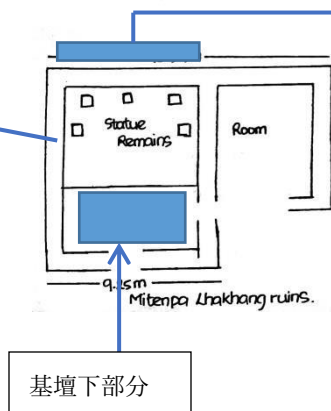
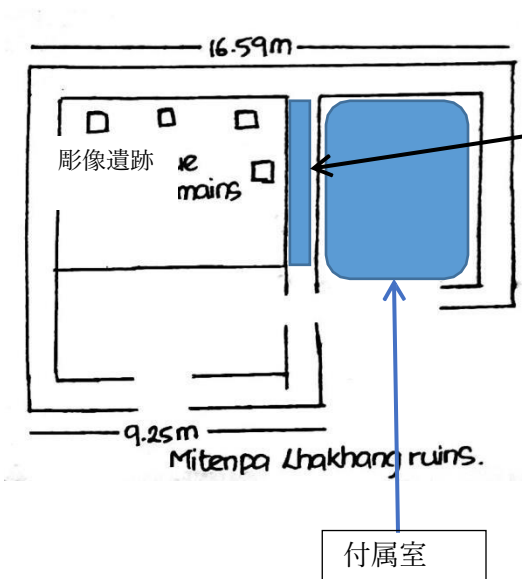


図 6. ラーカン背後のつけ壁

ラーカンには小部屋のようなものが付属している。壁の後部ファサード以外はほとんどが崩壊している。このラーカンの東側の外壁は、ラーカンの他の外壁と同様に漆喰がよく塗られていることから、この部屋が後世に付けられたことを示す証拠となっている。また、外壁の上部にケマル（図 7）があり、これが宗教的な建造物であることを示す。崩壊した壁の破片で覆われているため、この部屋の機能を見極めるのは困難である。しかし、その大きさと位置から判断すると、おそらくほとんどの古代寺院に見られる管理人室であったと考えられる。



付属室

東側ファサードのケマル

図 7. ミテンパ・ラーカン遺跡の付属室

ラーカン近傍には、集会や祭りをを行うための広場がある。ラーカン遺跡全体は、石造・版築造である。ラーカンの外壁には、粒径の細かい土を使った漆喰が塗られている。

ラーカン遺跡の北東には、ラム宅跡からなる大きな建造物がある（図 8）。ラム・ンガワン・ドルクパは偉大なラマであり、その居宅も非常に大規模であった。ラーカンはラム宅の上部に配置するのが常であるが、ミテンパでは、玄関の扉からラーカンが望めるようになっており、ラーカンを敵から守るため意図的に居宅の方を上へ建てたと考えられる。居宅跡の前には壁の遺跡があり、おそらく防御のために建てられたに違いない。

この居宅は、背面のファサード部が約 21.35m、正面が約 21.45m で、壁の厚さは 1.55m である。壁に残るほぞ穴から、4 階建ての住宅であったことがわかる（図 9）。構造は、1 階に大きな部屋が 2 室、東西に小部屋が 2 室ずつ付いている。居宅はラムがひとりで使うには大きすぎるため、ラムの信徒を住まわせていたのではないかと推察される。

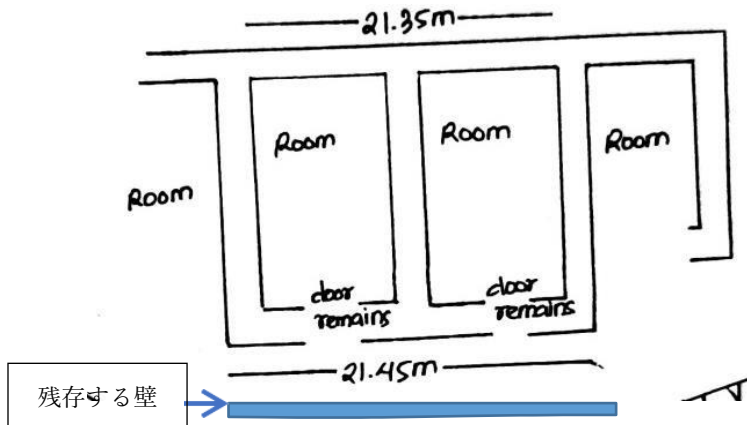


図 8. ラムの住居（ジムチュウ）略図

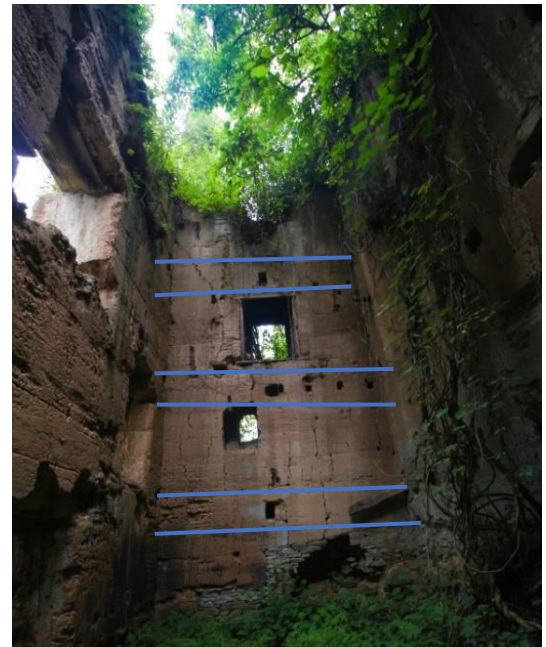


図 9. ラムのジムチュウのほぞ穴

ドアや窓の木製の上部横木（まぐさ）は今も形を残しているが、煤で不明瞭になっている（図 10）。煤の跡と壁の黒ずんだ部分は、火災で失われたとする口伝とも合致する。また、構造物の一部は土に埋もれている（図 11）。このため、施設全体の年代、形態、配置、機能を明らかにするには、科学的調査や発掘が不可欠である。



図 10. 扉の木製のまぐさ



図 11. 土に埋もれた遺跡

ニュージーランド

	南島南部テ・パパ・アタウハイにおける自然保護局の文化遺産保存プロジェクト（2022～2023 年）
	マシュー・シュミット 主任アドバイザー（遺産） ニュージーランド政府 保存局 ダニーディン事務所／ニュージーランド南島南部 テ・パパ・アタウハイ自然保護局（DOC）

はじめに

前回のレポートでは、2021 年から 2022 年にかけて南島南部（以下、SSI）で進行中の遺産保護プロジェクトやイニシアティブの例を紹介した。本レポートでは、保存作業が実施されたこうしたプロジェクトや、あるいは保全計画の第一段階が実施された新規のプロジェクトに関する最新情報を提供する。これらプロジェクトは、SSI 地域を構成する 6 つのオペレーション地区それぞれの 4 年間のヘリテージプランから生まれたものである。

歴史的なバックカントリーの小屋 - フリーマン・バーン、キャスウェル・サウンド、マーティンズ&ビッグダム／ターンブルズ・ダムハット

1930 年代にマレル一家が段ボールとリム原産の木材を使って建てたフリーマン・バーン・ハットについては、バックカントリー・トラストが保存計画と作業仕様書に基づき、構造の保存作業を実施した。向こう数カ月にわたって作業が続けられる予定となっている。図 2-5 には、2021 年、1960 年、そして今年行われた修復作業中のこの小屋の様子が描かれている。残念ながら、修復中に予想以上に骨組みの木材がキクイムシに侵されていることが判明し、交換を余儀なくされた。湿気の多いフィヨルドランドにおいて小屋を長持ちするよう、フレーム材を近代的な処理材と交換することにした。これらの木材は内壁内にあるため人の目に留まらないため、構造全体の保存のためには良い折り合い点だと判断した。内装材は、元々小屋に使用していた木材とマッチするよう、同じリム材を転用する形で交換した。最終的に小屋の内部配置は、確認されている 1960 年代当時の姿に戻されることになる。本プロジェクト終了時には、この小屋はフィヨルドランド国立公園を訪れるすべての人が利用できるようになる予定となっている。

3 棟の小屋の保存計画と工事仕様書が完成しているが、まだ資金が利用可能となって修復作業が開始されるのを待っている段階である。これらは、1949 年のキャスウェル・サウンド・ハット、1910 年のマーティンズ・ハット、そしてビッグ・ダム・ハット（ターンブルズ・ダム・ハット）で、おそらく 1898 年頃の建造と考えられているが、それ以前の可能性もある。

『ムリヒク・カィティアキ・モニターガイド』の更新

このガイドは現在執筆中だが、より急を要する保存作業のために遅延している。このガイドブックは、ムリヒクだけでなく、南島南部の広い地域を含むように拡張される予定である。また、日々の業務で遺

産を目にする機会が多いテ・パパ・アタウハイの人々のための機材も調達・購入済みであり、ガイドが完成すれば、トレーニングや実施が開始できるようになる。

マクミーキングの歴史的農場、オタゴ半島、デューンディン

オタゴ半島にあるこの小さな農家の歴史は1870年代に遡り、125年にわたる植民地時代の小規模酪農農家の連綿とした歴史を示している。保全計画で推奨された、昨年中に達成すべき2つの重要な取り組みは、建築遺産を確実に防水すること、そして繁茂する植生を取り除くことであった。最も困難な作業は、遺産である乾式石積みの壁の隣に生い茂る巨大なマクロカルパの木の撤去だったが、この作業は完了済みである（図6から図10）。

フィヨルドランド、ミルフォードサウンド、ボーエンの滝のウィリアム・ラスバンの墓

1894年に建てられたこの墓は、保存修復作業が順調に進捗中である。破損した墓石は撤去され、墓石を作りなおすにあたり採寸のため記念碑石工のもとに持ち込まれた（図11）。新たな墓石には、ヴィクトリア朝末期の墓石に使われていた石種に近い大理石を注文し、大きな滝壺の飛沫を受けたり、洪水地帯にあるといった墓の置かれたダイナミックな環境でも、より良好に保たれるものと考えている。また、墓の周囲は植物が繁茂して鉄細工を覆い、墓自体が見えにくくなっていた（図12）。鉄細工の脆弱部分を修復する資金がつけられるまで、鉄細工を乾かして保存に資することができる。生い茂る草木の撤去中に、ラスバンの埋葬の詳細を記した石板が発見された（図13）。この石板が墓に設置された時期は不明だが、1990年代であった可能性がある。

フィヨルドランド、チャーキー入江におけるスター・オブ・ザ・サウス号の大砲の回収

2021年7月、フィヨルドランド国立公園内のチャーキー入江の海岸で、地元で絶滅した可能性のある希少な在来種の鳥の痕跡を探していた一般市民2名が大砲を発見した。この発見が自然保護局に報告されたため、自然保護局が大砲の回収を行うことになった。この大砲は、1865年にチャーキー入江で岩に衝突して座礁したスター・オブ・ザ・サウス号と呼ばれる汽船のものの可能性がある。1865年と1867年のオタゴデイリータイムズ紙の2つの新聞記事が、船の座礁後、スター・オブ・ザ・サウス号の2名の乗客が大砲を高台に持って上がり、助けを呼ぼうと小さな海岸に運んだと伝えている。しかし、一旦陸に上げた大砲を移動させることがいかに困難か分かり、大砲は浜辺に放置された。幸い、座礁から数日後に乗客と乗組員が救出され、船は再び浮き上がり、1884年頃まで使用された。

大砲の回収のための適切な同意が得られた頃には、発見以来この地域を訪れた多くの人から、大砲が見つからないとの報告があった。幸い、2022年4月に小規模なチームの搜索により大砲が発見され（図14）、地元のヘリコプター会社の協力を得て遺物がフィヨルドランドから空輸され、最終的にウェリントンのニュージーランド海事考古学協会（MAANZ）本部の保存ラボに到着した（図15）。大砲の保存には約2-3年を要する見込みであり、その後フィヨルドランドに戻され、発見場所に最も近いテ・アナウ・ビジターセンターで展示予定となっている。

マオリ文化遺産の記録更新とアイランドヒル農場の修理（ラキウラ、スチュワート島／メイソン湾）

前回の報告で述べたように、ラキウラ西海岸のメイソン湾の巨大な砂丘が長年にわたって浸食されるうちに、多くのマオリ族の考古学的遺跡が露出してきた（図 1）。気候変動による高波の増加がこの浸食を加速させており、今後も続くとみられている。また、自然保護局による砂丘の修復作業により、遺跡が露出しているため、可能な限り監視・管理する必要がある。2022 年 2 月、自然保護局の遺産チームとオタゴ大学のボランティアは、DNA 分析のために骨が出土している遺産を探し、メイソン湾の既知の遺産 56 か所を移設することを試みた。33 の遺跡が移設され、その状態が記録された。これらの遺跡の多くは、砂丘平野部での風食と海岸浸食の影響を受けていることが判明した（図 16）。23 の遺産は、2015 年に初めて記録されて以来、侵食によって破壊されるか、植生が生い茂ったことで確認が困難になったため、移転ができなかった。新たに 6 つの遺産が確認されたが、これらはすべてマオリ遺跡である。これらの遺跡の遺跡記録用紙が更新され、新たな遺跡の遺跡記録が作成されている。

スチュワート島／ラキウラのメイソンベイにあるアイランドヒル農場は 1884 年に遡るもので、所有者のウィリアム・ウォーカーによって建造された。1926 年に増築され、現在では 19 世紀後半から 20 世紀初頭の特徴が混在する当時のままの農場の姿を残している。数年にわたり、自然保護局はこの農場と関連する建物（羊毛小屋やヤード、歴史的な柵、大きな設備や別棟の工作場の建物など）を修復・管理してきた。2022 年 2 月、このパケハ（ヨーロッパ系）農場の修理作業が行われ、農業施設内のすべての建物（外観と内部）の記録写真が撮影された（図 17 と 18）。修復作業では、農場の一室の壁紙に焦点を当てることとし、木張の壁にスクрим生地を貼り、その上から新聞紙を糊付けし、さらにヘリテージペーパーを貼り付けるという伝統的な壁紙施工方法を用いた。

ネッド&フィル・カレリー・コテージズ、ゴールデンポイント・リザーブ、マクレーズ

マクレーズにある自然保護局ゴールデンポイント歴史保護区は、1860 年代から 20 世紀半ばまでのマクレーズ地域の沖積鉱業と硬岩鉱業を物語る重要な場所である。ゴールデン・ポイントの硬岩鉱夫だったネッドとフィル・カレリー兄弟のコテージは 1920 年代に建てられ、当時としては珍しい土と泥レンガで造られている。これらの小屋は、屋根の修理や周辺の排水改善など、保存計画と工事仕様書に基づく様々な工事を必要としている。これら重要な工事は、2022 年から 2023 年初頭に開始予定である。

亜寒帯遺産保全活動

ハードウィック・セトルメント・サイト（1849-1852）、ドイツによる金星の通過観測地（1874）、そしてエンダービー島のサンディ・ベイ。19 世紀のフィンガーポストは、2022 年 2 月に自然保護局の全国撲滅チームが訪問し、これらの遺跡の保全作業を実施した。遺産保全作業は、オークランド諸島でのより広範な害虫駆除作業中に、遺産保全作業の経験を持つレンジャーによって行われる。実施された遺産保全作業は以下の通り。ハードウィック墓地への遊歩道では、はびこる植物を取り除き、墓地のフェンス内から実生を取り除いた。ハードウィックの 1868 年製アマースト船の帆柱は、保存に資するため 2020 年に地上の小さなブロックの上に置かれていたが、ブロックから落ちたため、ブロック上に戻し、メタレックス木材保存剤を 1 度塗布した（図 19）。「金星の通過」の記念碑から垂れ下がるように繁茂していた植物を刈り取って除去し、記念碑そのものを蚕食していた植物も取り除いた。サンディ・ベイ

のフィンガーポストは固定されておらず、風に吹かれていた。以前、誰かが善意から支柱にガイロープを取り付けられるよう、木片（亜鉛メッキの釘を曲げたものを取り付けた）を追加していたが、このロープは麻ひも製で、ポストの安全性を高めるものではなかった。この追加木材、釘、ガイロープ、それに関連するペグは取り除かれた。ポストの穴を掘り直し、柔らかい泥炭の中でポストがより確実に固定できるよう、ポストを玉石で覆った。さらに、ポストの周囲の地上部分にも玉石を設置し、ポストの防汚処理を施行した（図 20）。

アストロノマーズ・ポイント保存管理計画&ホームワード・バウンド保全計画&砲台修復の方法論

フィヨルドランド、ダスキーサウンドのアストロノマーズ・ポイント (<https://www.doc.govt.nz/parks-and-recreation/places-to-go/fiordland/places/fiordland-national-park/heritage-sites/astronomers-point/>) の保全・管理計画策定のための資金を獲得した。1773 年 4 月、この地は地球上で最も正確に位置を特定された場所であった。ジェームズ・クック船長がニュージーランドへの 2 度目の航海を行った際、彼の船レゾリュション号を 5 週間停泊させたのがこの場所である。経度委員会のウィリアム・ウェールズは、ジョン・ハリソンのクロノメーター H4 をコピーしたラルカム・ケンドールの精度を試験するため、この小さな岬に天文台を建設した。その結果、ウェールズは経度を正確に測定することができ、クックの地球上の正確な位置を特定することができたのである。クックの部下が切り開いた森は、現在も残る切り株とともに見ることができる。フィヨルドランドで最も訪れる人が多い遺産のひとつであるが、遺産の管理や訪問者によるリスクに対するアドバイスが必要とされている。

ホームワード・バウンド・スタンパーは、ニュージーランドの金鉱地帯で発見された典型的な金印工場の中でも最も優れた例である（<https://www.doc.govt.nz/parks-and-recreation/places-to-go/otago/places/macetown-historic-reserve/homeward-bound-stamper-battery/>）。長年にわたり、保存計画、工場の設計図、工学的手法などが開発され、工場の保存の指針となってきたが、こうした報告は時代遅れとなっている。今、この途方もなく複雑な構造を安定化し、保存するためには、現代的なアプローチと技術を取り入れた包括的な計画と手法が必要である。

結論

上述した自然保護局のSSI地域における文化遺産の保存・管理プロジェクトは、同地域が例年実施している遺産保護活動のほんの一部である。こうしたプロジェクト以外にも、ヘリテージレンジャーは日常業務の一環として、数多くの遺産を継続的に維持・保存している。このような活動は、外部からの貢献なくしては成り立たないものである。

謝辞

SSI の遺産保護活動は、自然保護局ヘリテージレンジャーと地域のオペレーションマネージャー、イウィの献身的な活動、そして自然保護局のヘリテージアドバイsteamからの意見によってこそ達成されるものである。またこれらのプロジェクトの成功の鍵は、外部関係者による尽力でもある。



図 1.議論されている遺産の位置



図 2.1930 年代に建てられたフリーマン・バーンハット (写真：NZHP Ltd)。

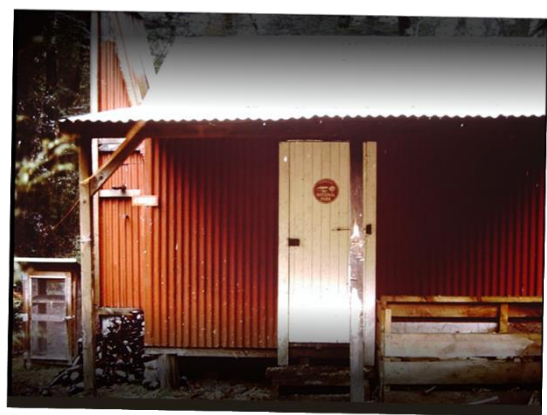


図 3.1960 年代のフリーマン・バーン・ハット (写真：DOC archives)。



図 4.修復中のフリーマン・バーンハット (写真 : Rob Brown)。



図 5.修復中のフリーマン・バーン・ハット (Photo: Rob Brown)。



図 6.1870 年代のマクミキングズコテージ周辺の植生 (写真 : DOC)。



図 7.周囲の草木が取り除かれた後のマクミキングズコテージ 1870 年代 (写真 : DOC)。



図 8.McMeeking's Farmstead の建物や石垣を危険にさらす macrocarpa の巨木(写真 : DOC)。



図 9.McMeeking's Farmstead の建物や石垣を危険にさらす macrocarpa の巨木(写真 : DOC)。



図 10. McMeeking's Farmstead で macrocarpa の木が取り除かれた後に露出した石壁 (写真: DOC)。



図 11. ミルフォード・サウンドにある 1894 年のウィリアム・ラスパンの墓から取り出された、壊れた墓石の 2 つの破片のうちの 1 つ。水滴のミストに注意 (写真: DOC)。



図 12. ミルフォード・サウンドにある 1894 年の William Rathbun の墓から取り除かれた築土と植生 (写真: DOC)。

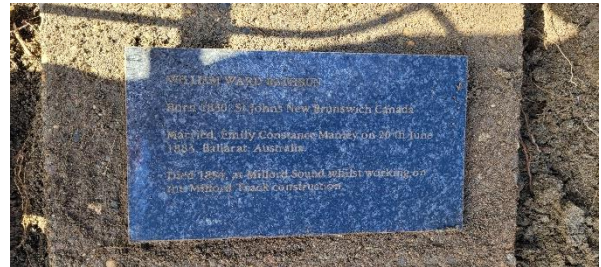


図 13. ラスパンの墓の土や草木の下から見つかった墓のプレート (写真: DOC)



図 14. チャルキー入江から回収される スターオブザサウス 1865 年製大砲 (写真: DOC)。



図 15. ウェリントンの Maritime Archaeological Assn of New Zealand (「MAANZ」) 保存研究所で保存槽に入れられた 1865 年製の *Star of the South* 大砲 (写真: Kevin Jones)。



図 16. スチュワート島／ラクウラ、メイソン湾の復元砂丘地帯で記録されたマオリ・オープン。外来種のマラムグラスは除去され、炉の周囲には在来の砂丘草ピカオが見られる（写真：DOC）。



図 17. DOC によって何年もかけて修復された、スチュワート島／ラクウラのメイソンベイにある 1884/1926 年のアイランドヒル・ホームステッド（写真：DOC）。



図 18. アイランドヒルの羊毛小屋ビーチやホームステッド周辺から回収した木材と、19th 世紀の窓を再利用して、1953 年に建てられたアイランドヒルのウールシェッド。



Figure 1. Amherst Spar at Hordwick: was treated with preservative during the expedition

図 19. 2022 年 2 月に小さな木製ブロックに載せて木材保存剤を塗布した 1868 年のアマーセント・スパー（写真：DOC）。



図 20. 2022 年 2 月に行われた保存作業の前（写真左）と後（写真右）の Sandy Bay, Enderby Is. のフィンガーポスト（写真：DOC）。

フィリピン

	サン・アグスティン修道院図書館 - マニラ: 失われた古文書のデジタル復刻
	ロエラ・レヴィラ-ベイシック 保存室長 サン・アグスティン博物館

歴史的背景

マニラのイントラムロスにあるサン・アグスティン教会は、かつてコンヴェント・デ・サン・パブロと呼ばれ、フィリピンのイエス至聖名管区に属するサン・アグスティン修道会が運営するユネスコ世界遺産である。サン・アグスティン教会は 1571 年、スペイン国王フィリップ 2 世の命で、ミゲル・ロペス・デ・レガスピによりアウグスティヌス修道会へ捧げられたもので、最も広く知られた教会である。バロック様式のレタブロ、控え壁の役割を果たす地下礼拝堂、壁や天井に描かれただまし絵など、優れた特徴を持つ。この旧修道院は 1973 年に博物館となり、現在、アウグスティン修道会の宝物、フィリピンにおける数世紀にわたる豊かな植民地美術・教会美術の宝庫となっている。現在、教会修道院の 2 階には、1552 年から現在までの稀観書を取るオールド・ビブリオテカ（図書館）がある。

1571 年以来、サン・アグスティンはフィリピン随一の重要な図書館を擁していた。それは、長い年月の中で様々な災禍に遭ってきた。サン・アグスティンの最古の建物は、1574 年に大きな損失を被った。リマホンの侵攻の際には、街は戦火に包まれ、多くの家屋が消失したが、サン・アグスティン修道院も同様で、書物や装飾品を含むあらゆる物資が保管されていたため、近年建立された修道院は竹やニパ（椰子）を建材とした建物となった。¹

さらに、竹材、スラブ、ニパを用いた 2 代目の建造物も 1583 年の総督ゴンサロ・ロンキージョ・デ・ペニャロサの葬儀の際に焼失した。木竹造の 3 代目の建造物は、1586 年 3 月 30 日の棕櫚の聖日に出火し、（このため）彼らの家は再び崩壊した。また、マニラ有数の蔵書数を誇った私設図書館も灰燼に帰した。²

1587 年建造の現在の建物はより堅牢な建材を使用しており、大地震や災難、侵略にも耐えてきた。当初、図書館はサンタ・ポテンシアーナの回廊に位置していた。この部分を除けば、特に 1701 年以降、図書館は多大な変化を遂げた。³アグスティン修道会のアグスティン・マリア・デ・カストロ修道士によると、「しばらくの間、アグスティン修道会は完全な福德円満を享受し、事態の変化を恐れるようなことは起きなかった。ところが、1761 年 12 月末にスペインが英国に宣戦布告するや、イングランドから

¹ ロドリゲス、イサシオ、O.S.A. *The Augustinian Monastery of Intramuros*. CSA, マカティ, 1976. p. 6

² ロドリゲス 『アウグスティン修道院』 p.8

³ ロドリゲス 『アウグスティン修道院』 p.35

出航した2艘の軍艦は直ちにマドラスに到着して、15艘の艦隊を組み、1762年9月22日にこのマニラ湾に到来、入港した」。⁴

アグスティン・マリア・デ・カストロ修道士はさらにこう述べている。「修道院・教会も略奪され、没収対象となった。このことは1762年11月3日に公に宣言された。12月8日、彼らは再び修道院を精査した。彼らは図書館に行き、すべての蔵書をマニラ在住の弁護士ドン・サンティアゴ・オレンダイン宅に移動し、それらを少しずつ売却させた。彼らはまた、修道院と州の2つの古文書を持ち出してこの弁護士に届けて検査させ、処理の終わった後に我々がこれらを回収して修道院に戻した時には、州の古文書からは多くのページが失われていた。彼らは修道院を壊滅的な状態にし、1764年1月もしくはその少し前に我々が復旧のために戻った際には、腰掛けるベンチや板もなく、帽子を掛ける釘すらなかった」⁵。

サミュエル・コーニッシュ提督配下の英国兵は、5,000冊以上の古書を略奪した。アグスティン修道会の修道士たちにより図書館は再建されたものの、1898年の米西戦争によりまたもや被害を受けた。さらに1945年2月の米国によるマニラ爆撃で、図書館の至宝の蔵書（約2万冊）の多くが破却された。今日のサン・アグスティン修道院の図書館は、かつての面影を残すのみとなっている。⁶

プロジェクト：失われたアーカイブのデジタル返還

プロジェクト「A」は、プリンス財団伝統芸術学校の東南アジアプログラムマネージャーであるパトリシア・マリア・アラネタ博士が、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院のクリスティーナ・マルティネス・フアン博士にサン・アグスティンとの協力事業を提案したことから実現した。プロジェクトの資金はすべて、NEH-AHRC デジタル人文助成金で賄われる予定である。サン・アグスティン修道院の修道士会は、提案された作業の重要性を認識し、「スペイン統治下太平洋の失われたアーカイブのデジタル返還」プロジェクト提案に対する支持を表明した。サン・アグスティン博物館館長リッキー・B・ビラール修道士（OSA）は、一連の対話、サン・アグスティンにおける現地会談、そしてメールでのやり取りを経て、最終的に2021年6月10日にサン・アグスティン教会修道院を代表して調印を行った。この協定書は、サン・アグスティン教会修道院が図書館に残された手稿、書籍、資料の研究のために完全なアクセスを提供すること、図書館の内容やその歴史のデジタル復元に役立つような図書館に関する写真・文書の提供と共有、図書館資料の目録化とデジタル化にかかる専門家との協力、今後助成金が利用可能となった際には管理を行うことを明記している。

昨年2022年6—7月、このプロジェクトの関係者であるSOASのクリスティーナ・フアン博士と、プロジェクト責任者であるプリンストン大学のクリスティーナ・リー博士、アーキビストのレガラド・トロタ・ホセ博士が、サン・アグスティンの図書館と書庫内の書籍を徹底的に調査した。その目的とする

⁴De Castro, Agustin Maria, O.S.A. マニラ、サン・パブロのアウグスティヌス修道院。1770年のサン・アグスティン。Museo San Agustin Manila, 2015. p.4

⁵デ・カストロ『サン・パブロのアウグスティヌス修道院』p.61

⁶現在のサン・アグスティン図書館（旧ビブリオテカ）のキャプション

ところは、英国の侵略を免れた書籍があるかどうかを確認することだった。16 世紀から 18 世紀までのマニラのコンVENT・デ・サン・パブロ・デ・マニラの所有権を証明する書籍が存在することは驚くべきことである。これらにより、1762 年から 1764 年にかけての英国侵攻時に略奪された書籍や写本がデジタル化され、本国へ返還されることになる。書籍は目録化、スキャンされ、デジタル化される予定である。現在、サン・アグスティンの上級職員が、この協定の一環として、選定された書籍や手稿の目録作成作業を手伝っている。これら情報は、プロジェクトマネージャーが作成したメタデータ用スプレッドシートに入力され、各資料についてより詳細な情報を得ることが可能となる。サン・アグスティン旧図書館に現存する最も古い書籍は、1552 年、1567 年、1568 年、1589 年、1591 年、1594 年、1596 年、1597 年発行のものである。

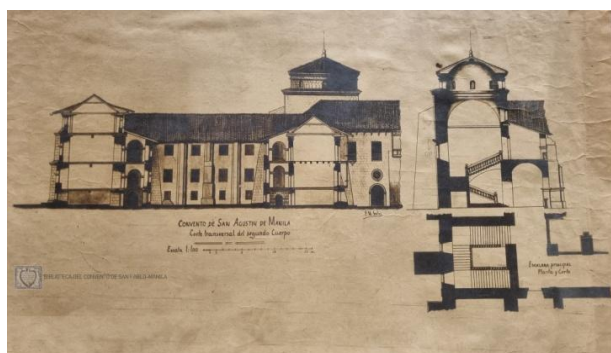


図 1. 断面図：P.U. ソリス作 "Convento de San Pablo Manila"



図 2. 旧図書館（1865 年）

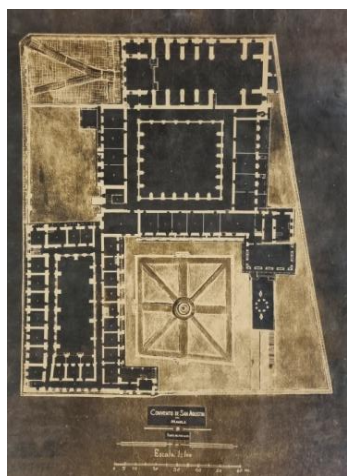


図 3. マニラ、コンVENT・デ・サン・アグスティン

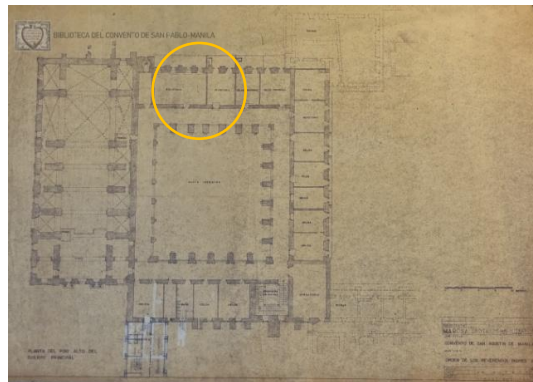


図 4. サンタ・ポテンシアナ通りと並行する以前の図書館場所



図 5. 現在の図書館、その教会修道院の 2 階



図 6. 現図書館での蔵書目録作成風景
書籍の一部は最終的に復元される予定



図 7-14. 現在進行中のプロジェクトと現図書館での図書目録作成



図 15. 1552 年の書籍



図 16. 1567 年発行の製本古文書



図 17. 古書の中から発見された修道士会の印章

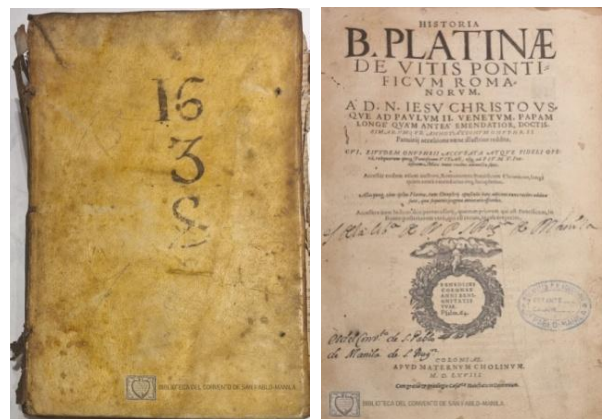


図 18-19. 古文書集の表紙と 1568 年版の扉

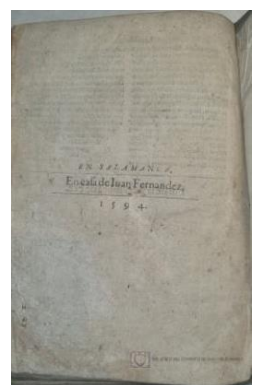
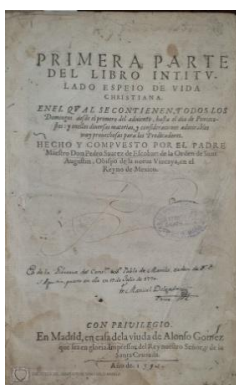


図 20-21. 1591 年刊行の書籍

図 22-23. 1594 年刊行の書籍



図 2 4. 1597 年刊行の書籍

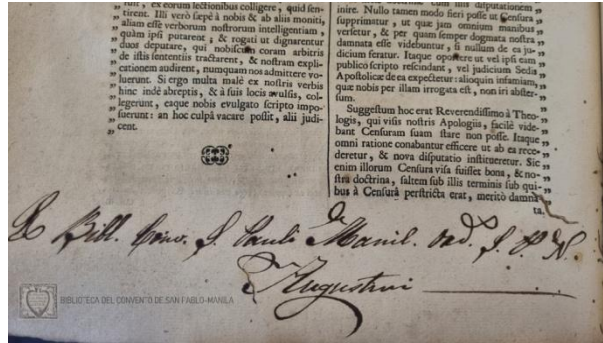


図 2 5. 所有者を示すいくつかの書物の注釈



図 2 6 - 2 7. 1611 年発行の本

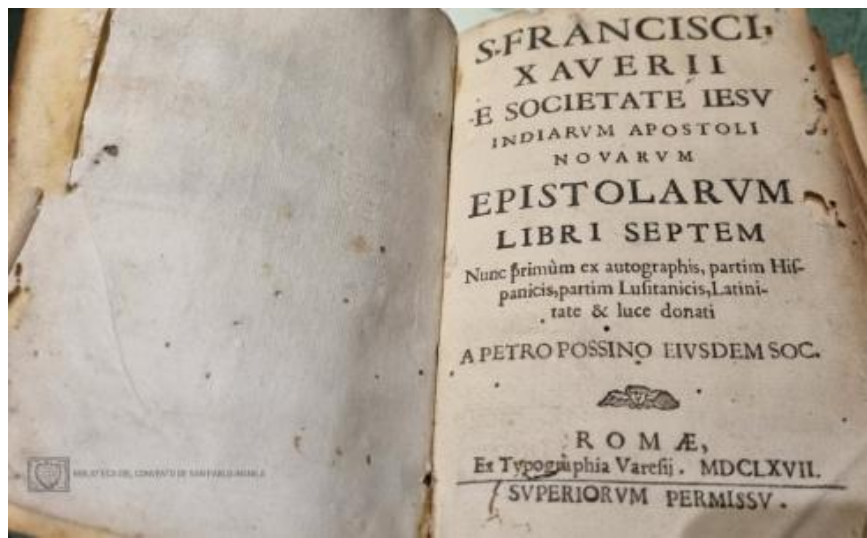


図 2 8. 1667 年発行の本



図 2 9. サン・アグスティン美術館に展示中のサン・アグスティン修道院の歴史家・司書であったアグスティン・マリア・デ・カストロ修士（1740-1801）を描いた現代画。

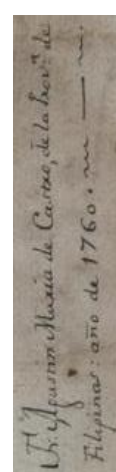
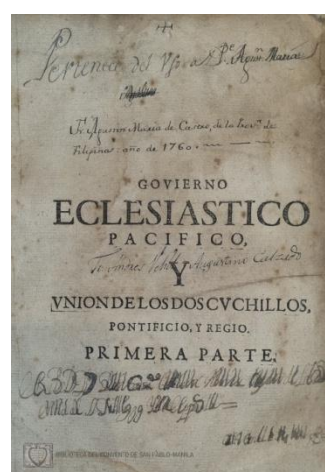
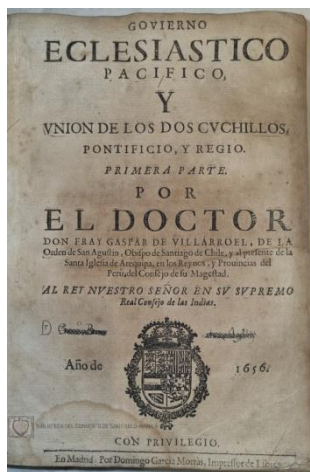


図 3 0 - 3 2. 扉、表紙、司書に関するメモ書き。 1656 年の書籍

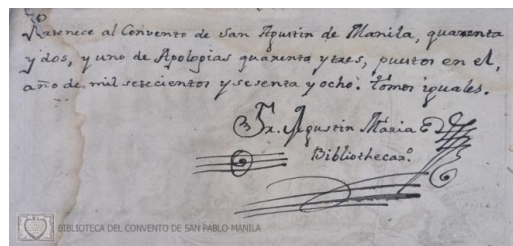
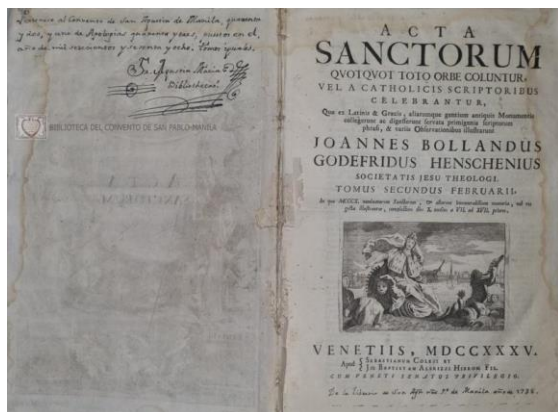


図3 3-3 4. 1735 年刊行の書籍。前司書であるアグスティン・マリア・デ・カストロ修道士（OSA）が、この書籍の数巻がマニラのサン・アグスティン修道院に存在すると記している。

プロジェクトに関する参考資料・詳細

「イギリスの占領が終結すると、サンパブロ図書館の資料の大半は、悪名高いドーソン・ドレイクの後任としてごく短期間のあいだ諸島総督を務めたスコットランドの水路学者アレクサンダー・ダリンプル（1737-1808）の手に渡った。ダリンプルが跡継ぎなくして逝去すると、故人の膨大な書籍や手稿のコレクションは競売にかけられたが、その中に今日「マニラ文書」と呼ばれるものがあつた。このコレクションは、イギリスでオークションにかけられ、3つの大陸に散らばった。現在では、本来の場所にあるのは約100点のみである。サンパブロの残りのコレクションは、インディアナ大学のリリー図書館、マニラのロペス博物館、大英図書館、ロンドン大学 SOAS、キングスカレッジに散在している。」⁷

「このデジタル人文学プロジェクトは、サン・パブロ修道院のアーカイブから持ち出された書籍と手稿の返還を企図している。サン・パブロ図書館内容のオリジナル・インデックス、図書館の蔵書の使用と分散に関するスペインとイギリスの記録、オークションの記録、図書館の取得と出所の記録を使って、プロジェクトは図書館の資料を1762年に近い状態で仮想的に再構成するものである。」⁷

謝辞：

フィリピン・イエスの至聖名修道会アウグスティノ修道団、サン・アグスティン教会修道院、サン・アグスティン博物館、サン・アグスティン博物館館長リッキー B. ビラル修道士（OSA）、Patricia Maria Araneta 博士、Cristina Martinez Juan 博士、Christina Lee 博士、Regalado Trota Jose 博士に。



⁷<https://library.philippinestudies.uk>。スペイン領太平洋で失われたアーカイブの送還：サン・パブロ修道院の図書館（マニラ、1762年）。この公開プロトタイプは、以下の団体から寛大なる資金提供を受けている。a 2020年11月 ロンドン大学 SOAS のシード・コーン・グラント、およびリリー図書館のエバレット・ヘルム客員研究員によるもの。